

幼少期の指標だけで、う蝕が減少していると判断して良いのか

相 田 潤

Should we use childhood caries index to conclude dental caries has declined?

Jun Aida

日本の歯科口腔保健政策において、3歳児や12歳児のう蝕の指標（DMFT指数や有病者率）が、う蝕全体の指標として用いられている。そして、う蝕は減少しているという認識が共有されている。実際、中央社会保険医療協議会の資料においても今後のう蝕の減少および、「う蝕なし」が明記されている（図1）¹⁾。しかしながら、こうした判断は残念ながら、公衆衛生学的に必ずしも正しいわけではないと考えられている。この理由は以下のようなものである。

1. 高齢者の現在歯数が増加したことで、高齢者のう蝕は増加している（図2）。この世代は子どもよりも人口が多い。
2. う蝕は線形またはS字型に増加していく疾患であり、3歳や12歳の指標ではその増加を把握できない。
3. う蝕は世界で最も有病率が高い疾患であり、これは日本においても同様である。減少していても、他の疾患に比較して極めて多い。最も多い疾患が、「う蝕なし」になるとは考えられない。

1. については、図1にあるように平成28年歯科疾患実態調査において、う蝕の減少は34歳以下で認められるが、35～44歳では減少は見られず、45歳以上ではむしろ増加していることが示されている²⁾。現在歯数の増加傾向は続くと考えられるため、う蝕の増加は続いていくと考えられる。

2. については、ニュージーランドにおける長期コホート研究において、う蝕は年齢とともに増加していくことが示されており、とくに10代後半の年齢からの増加は大きい³⁾。日本においても、20歳以上の成人・高齢者の30%以上の者が未処置歯を有しており²⁾、このことが示唆される。

3. については、世界疾病負担研究から歯科疾患は291疾患の中で最も多い疾患（1位：未処置の永久歯う蝕、6位：歯周病、10位：未処置の乳歯う蝕）であることが示されており⁴⁾、日本においても同様に高い有病率である⁵⁾。その結果、特に64歳以下では歯科疾患の医療費は、がんや糖尿病よりも多い（一人一人の医療費はこれらの疾患よりも安い）、罹患する人数が多いので医療費総計は大きくなる⁵⁾。

1970年代以降、う蝕は減少しており、そのことは歯科専門職に共通して認識されている。中央社会保険医療協議会の資料にあるように重症のう蝕は確実に減少しているであろう。しかし、他職種に歯科の重要性を説明する際には、「う蝕は世界一多い疾患だけあって、減少しても他の疾患よりもずっと多い。多くの人が苦しんでおり、社会への負担も大きい。」ということを説明するべきだと考えられている⁵⁾。子どものう蝕のイメージに引きずられて、公衆衛生施策の方向性を誤ってはいくならないであろう。

【著者連絡先】

〒980-8575 宮城県仙台市青葉区星陵町4-1
東北大学大学院歯学研究科国際歯科保健学分野
相田 潤
TEL：022-717-7639 FAX：022-717-7644
E-mail：j-aida@umin.ac.jp
受付日：2017年11月28日 受理日：2017年12月5日

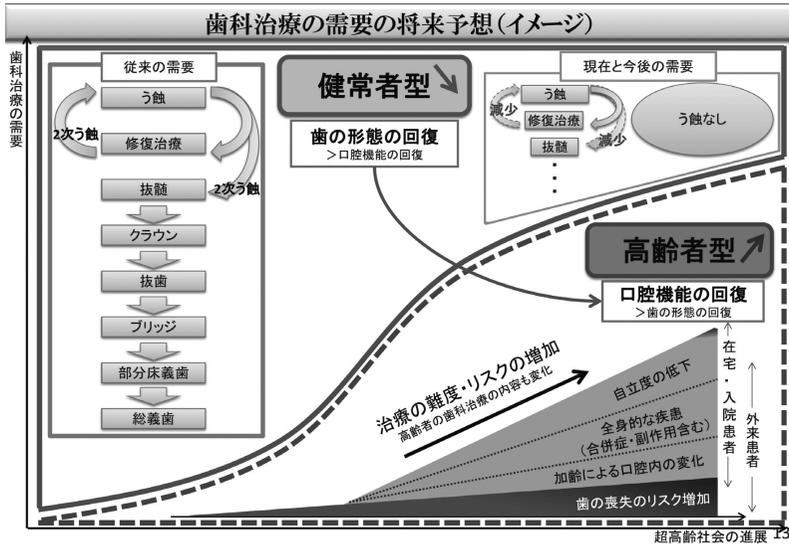


図1 「う蝕なし」が明記されている中央社会保険医療協議会の資料¹⁾

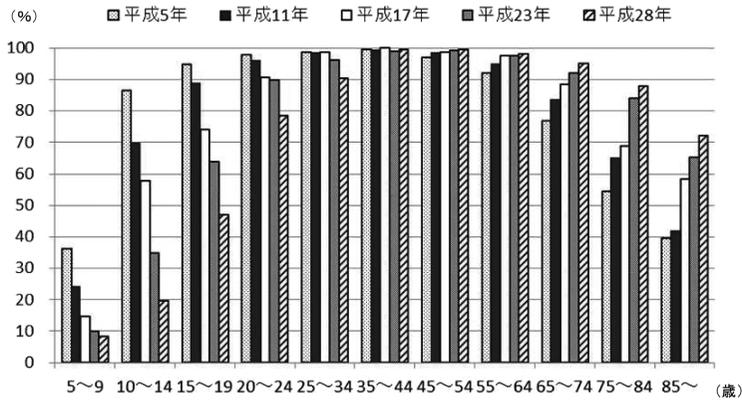


図2 45歳以降、特に高齢者で増加しているう蝕(平成28年歯科疾患実態調査より)²⁾

文 献

1) 中央社会保険医療協議会：歯科医療について：
[http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12404000-Hokenkyoku-Iryouka/0000092345.pdf]

2) 厚生労働省：平成28年歯科疾患実態調査結果の概要：
[http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/62-28-02.pdf]

3) Broadbent JM, Thomson WM, Poulton R：Trajectory patterns of dental caries experience in the perma-

nent dentition to the fourth decade of life. J Dent Res 87：69-72, 2008.

4) Marcenes W, Kassebaum NJ, Bernabe Eほか：Global burden of oral conditions in 1990-2010：a systematic analysis. J Dent Res 92：592-597, 2013.

5) 相田 潤, 小坂 健：歯科口腔保健の重要性：疾病の公衆衛生上の重要性の4基準からの考察. ヘルスサイエンス・ヘルスケア 14：3-12, 2014.